

羅針盤

KANSAI GAIDAI KYOSHOKU JOURNAL

教職を目指す学生・卒業生のために

COMPASS

第124号 2017.10.28(土)発行

関西外国語大学
教職教育センター

SCET+

英語キャリア学部 教授 角野 茂樹

すっかり秋になり、少し寒い日もありますが過ごしやすくなりました。秋学期のスタートとともに ICC も活気づいています。今朝も学生と警備員さんの「おはようございます。」の元気な挨拶が聞こえてきます。

教員採用試験の2次選考の後半も終了し、最終合格の結果も次々と発表されています。ふり返りますと、昨年の秋、学生たちが自主ゼミをスタートさせました。小学校教員コースの学生は11月から教科専門をスタートさせ、中高の英語教員をめざす学生も、一般教養・教職教養・時事問題に取り組んできました。ICCの2階の教室を借り、二つのグループのこれらの取組の輪が広がり、今年度も4月から、中宮・学研キャンパスで「合宿」「夜スペシャル」「サイスペ」をスタートさせ、そして、学生は夜遅くまで図書館で自主勉強を積み重ねてきました。

8月の初旬に1次合格の発表があり、多くの学生がそれを突破し、盆明けから始まる2次選考にむけて英語討論や模擬授業、個人面接の取組を強化し、全国各地で2次選考突破に向けて奮闘してきました。

学生たちは、一つひとつの山を乗り越え、確実に成長し、社会人として、教師として必要な資質・能力を身につけてきました。随分とたくましくなりました。

一人ひとりの学生が、自分らしく教育への使命感と情熱をもち、児童生徒に愛情を注ぐ教師になるよう、将来の自己実現にむけて着実に歩み始めることを期待しています。

～羅針盤124号 目次～

教員採用試験合格者の声	…2～7頁
☆学生人材バンク活動報告☆	…8～13頁
★今後の学生人材バンク活動予定★	…14頁
編集後記	…14頁
シリーズ23「心の窓を少し開いて！」	…15頁

教員採用試験合格者の声

2018年4月から教諭になることが決まった学生に、これまでの学生生活とこれから先の人生の通過点として、手記をまとめてもらいました。

英語国際学部 英語国際学科 4年生 北條胡桃さん

皆さん、こんにちは。この度、千葉県教員採用試験において英語科教員として採用して頂きました。私が採用試験を終えて感じたことをいくつか挙げさせていただきます。皆さんの参考になれば幸いです。

まず、採用試験を受けるに当たって、自分の経験の無さを痛感しました。ボランティア活動の経験が無かった私は、面接の際、周りと比べてアピールポイントが少なく、とても苦労しました。「面接で役に立つから」という理由だけではなく、大学生活で培った様々な経験は新たな価値観との出会いともなります。時間のある2回生、3回生のうちにボランティア活動、留学、英語の資格取得など、様々な経験を積んでください。経験を積むだけ自信につながると思います。

次に、採用試験の勉強についてです。試験の内容は自治体によって異なりますが、特に一般教養、教職教養は早めの対策が必要です。私は3回生の秋にサイスペに通い始めました。勉強を始めた当初は、「採用試験は個人戦だ。」という認識を持っていましたが、サイスペに通い始め、その考えは変わりました。特に面接練習においては、友達と意見交換をする中で、新しい意見に沢山出会いとても刺激を受けました。面接では、自分の良いところを試験官にアピールしなければいけません。友達と一緒に面接練習を行うことでアピールポイントを引き出してもらえたり、無意識に手を握る癖、話し方の癖などを指摘してもらえました。最初はなかなか自分の意見が言えず、ダメなところばかりが目立ち、落ち込むこともありましたが、練習を重ねるうちに自分の強みも見えてきました。

最後になりますが、私が皆さんに一番伝えたい事は、教員採用試験を仲間と共に乗り越えてほしい、ということです。私はネガティブな性格で、弱音を吐いてばかりでした。特にサイスペの帰りは、落ち込むことが多かったです。そんな時一緒に頑張ろうと支えてくれた先生や仲間のおかげで合格することができました。ありがとうございました。

絶対に合格するぞという強い意志を持ち、仲間と共に最後まで走り続けてください。心から応援しています。

外国語学部 英米語学科 4年生 細田敬矢さん

私は教員採用試験に向けて重要であると考えているものが3つあり、それらは、仲間・先生・気持ちである。教員になるためには、まずは教育に関する知識を増やす必要がある。これは一見、独りで出

来そうなことであるが、私は決してそうではないと考える。なぜなら、勉強とは自分自身との闘いで、勉強に終わりが見えない。勉強をいくらしても足りない気がする。だからこそ仲間が必要であり、折れてしまいそうな時、彼らが支えてくれるのだ。仲間が同じ苦しみを味わいながら前に進んでいるからこそ、自分も歩むことが出来る。それだけでなく、仲間は自分だけでは補えない情報を与えてくれ、何より未来の生徒の想像を共にして気分を盛り上げてくれる。これに加え、より具体的に良い教員になるために、指導して下さる先生方が必要である。学生だけでは見えない点や未熟な部分を先生方が助言して下さる。だから自分で悩んで答えが見つからない時には、先生に相談することで、次の瞬間には以前より一歩成長した自分となることが出来る。しかし、教員採用試験の準備は決して楽な道のりではなく、いつも重たく厳しいプレッシャーやストレス、不安が襲ってくる。これを上手にコントロールするために、自分だけのストレスマネジメントを見出しておく必要がある。私は、どれだけ辛くても、命がある限りは何か良い事があるだろうという考えを根底に持っていたため、たいていのストレスを溜め込まずに済んだ。そして勉強の不安は、“Better Than Before” この一言で救われた。昨日より何か1つでも新しい単語を得たら、それは成長である。だから私は、自分の成長が止まっていると感じたことはない。これから教員採用試験を受ける人達にも、自分だけのセルフコントロールできる考えを見出してほしい。教員採用試験に合格するための準備は、未来の生徒のためにすべてが繋がってくる。皆様のご健闘お祈りしております。

英語国際学部 英語国際学科 4年生 今津直樹さん

この度は多くの方々の支えがあり、岡山県の私立高等学校を教諭で合格することができました。教員採用試験を通じて学んだことをこの場で2点共有したいと思います。

①「目標を立てた学習と向上心をどう高めるか」

皆さんの中には、教員採用試験を受ける前に教育実習に行かれる方が多いのではないかと思います。実際、私自身も実習が終わった1週間後に教員採用試験が始まりました。7月前後から始まる教員採用試験で、自分が望む結果を出すためには目標と計画を立てた学習が不可欠です。

私は「自分の決めた学習範囲は必ずこなす！」と決めて、毎日学習することを意識して取り組みました。どんなに忙しくても、「今日は3問だけは必ず解く！」と心に決めたら必ず解いて、自分が決めた約束を毎日果たしていく中で、「自分ってやればできる！」と自信を高めることができました。さらに、「もうちょっと頑張ってみようかな！」とチャレンジしたいと思える気持ちを持ちながら、意欲的に学習に取り組むことができました。私はこうした日々の小さな達成感と努力の積み重ねが、来年度の教員採用試験で感動できる結果に繋がると思っています。

②「仲間と過ごす時間をどれだけ大切にできるか」

私は学研都市キャンパスの教職サークル「サイズペ」に3回生の時から参加し、個性豊かな仲間とともにコミュニケーションをとりながら、自分の価値観を日々広げてきました。昨年教諭になられた先輩がおっしゃっていた「教員採用試験は人物重視」であることを念頭に置き、「私が教員になったら、こんな生徒を育てたい！」という強い信念を持ってスピーチ練習を一生懸命取り組んできました。

しかし、どんなに苦しくて諦めなくなっても、最後の最後まで努力し続けることができたのは、根気強くアドバイスをしてくださった西村先生をはじめ、お互い励まし合える大好きな4回生、そして4回生に学びの刺激を与えてくれた3回生の存在が大きかったからだと思います。面接に関わらず筆記試験、模擬授業等においても仲間と共に過ごした時間が私を支えてくれました。これから教員を目指す皆さんもかけがえのない仲間とともに支え合い、協力しながら自己研鑽してほしいと思います。

最後になりましたが、皆さんが学生時代に受けることができる教員採用試験は一生に一度きりしかないなので、悔いのないように臨んでください。教職の仲間と共に教師を目指す今を大切に過ごし、切磋琢磨しながら、教員採用試験を乗り越えて行ってください。

Go for your dream!

外国語学部 英米語学科 4年生 絹村太裕さん

私は静岡県の教員採用試験を受験しました。関西地区ではない静岡県を受けたため、試験勉強を始めた最初の頃は誰に相談したらいいのか、一緒に勉強をしてくれる人はいるのか、などを考えてしまいとても心配していました。しかし、ゼミができ始めたことや夜スベが始まるうちに一緒に勉強したり、意見を言い合ったりできる友人と出会うことができました。それぞれ第一志望の都道府県が違っても、合格するという一つの目標に向かって互いに頑張りました。毎日同じ仲間と同じ場所で、朝早くから大学が閉まるまで勉強をしていました。もし、一人だけで問題を解いていたり面接の参考書を開いて読んでいたりしていたら途中でくじけていたと思います。一緒に夜遅くまでや暑い夏の日にも付き合ってくれた仲間がいたから、たくさん覚えなければならない知識、面接練習、模擬授業にも立ち向かえたと思っています。だから、まず自分の意見をしっかりと伝えて自分に対してしっかりと意見を言ってくれるようなお互いに信頼できる関係の仲間を作り、個人ではなく団体で取り組むといいと感じました。

教員採用試験を無事終えて来年からは大きく生活が変わります。教師になることは自分の中の目標でした。目標が達成されてここで止まってしまうのではなく、また新たな目標を作り、止まらずに進みたいと思っています。さらに、教員採用試験まで英語やその他の知識を吸収するために勉強を続けていました。しかし、まだ私の知識は未熟で、吸収できるもの、吸収すべきことは沢山あります。だから、自分がどの立場になってもこの吸収し続ける気持ちは忘れずにいたいと思っています。

英語キャリア学部 英語キャリア学科 小学校教員コース 4年生 山口 里桜子さん

私は、愛媛県の教員採用試験を受験しました。大阪で一人暮らしをしながら、また、近くに愛媛県を受験する友達がいなかったため、多くの不安がありました。しかし、こんな状況の中で合格できたことには

3つの理由があると思っています。

1つ目は、「常に教育に関してアンテナを張る」ことです。私は、3回生の10月頃から本格的に勉強を始めましたが、ニュースやテレビ番組で気になったことや、授業で疑問に思ったことはすぐに調べてノートに書き留めるようにしていました。愛媛県は試験内容に一般教養があります。これは詰め込んで覚えられるものではありません。日頃の興味・関心が本当に試験に直結しました。

2つ目は、「自分のペースでコツコツ勉強する」ことです。教員採用試験が近づくとつれて、体力的にも精神的にもしんどくなってきます。集中したいときは図書館や、ICCの空き教室で勉強したり、疲れてきたら友達と問題を出し合いながら楽しく勉強をしたりしました。友達や先生の言動でどうしたらいいか分からなくなるときもありますが、自分のやり方を信じて勉強していくことが大切だと思います。

最後は、「家族や友達、先輩、先生を頼り、一緒に頑張る」ことです。私がここまで頑張ってきた一番の理由はこれだと思っています。分からないことがあれば家族、友達、先輩、先生にすぐに聞いて、苦しいときは友達と励まし合い、先生に悩みを打ち明け、家族からのエールをもらいながら乗り越えてきました。

教員採用試験のラストスパートは、1日中、小学校教員コースの共同研究室にこもっていました。例え受験地や受験校種が違って、教師という同じ夢に向かって頑張る友だちがいたら、絶対に最後まで諦めず突っ走ることができます！！

英語国際学部 英語国際学科 4年生 島野勇太郎さん

はじめまして。今年度、静岡県、愛知県、大阪府の1府2県から、合格を頂きました。私の場合、教育実習が秋にあったため、大阪府の3次試験と被る日があり、まさに7月から9月末まで3ヶ月間、怒涛の時間を過ごしていました。

今、振り返ってみると、大学に入ってから、そして採用試験に向けて勉強する期間、常に仲間に支えられていたなあ、と改めて気づくことができました。学研都市キャンパスでは、サイスペ(教員採用試験対策スペシャル)という自主的な勉強会があります。その中で、先輩からの励ましや、西村先生から「走り続ける」スピリットをもらい、その勢いをそのまま教員採用試験の合格につなげることができたと心から感謝をしています。

さて、教採では一般教養や専門教養が求められますが、それと同様(県によってはそれら以上に)人柄、人間性が見られます。試験官は、「生徒、保護者、同僚、地域の方の立場、目線で受験者を見ている」ということを聞きます。そこで、わたしは、面接を受ける時の心構えとして、自分の言いたいことを言うのではなく、「面接官との会話を楽しむ」ということを意識していました。もちろん、相手はなにを聞きたいのだろう、何を求めているのだろう、と考えながらも、わたしも面接官を実際の上司、保護者、時には生徒と見立てて話をするように心がけました。すると、声のトーンが会話のように弾んできて、それまでの緊張が解け、自然な表情ができるようになりました。面接が苦手だと考える方は、このように捉え方を変えてみてはいかがでしょうか？

「面接の具体的な準備」ですが、様々な質問例を自分で考えてノートに書き、それに対する答えも

書いて、練習をしました。意識したのは「具体的に生徒に話すように」ということです。教師として、目の前の生徒に気持ちや目標達成に必要なイロハを伝えるためには、何が必要でしょうか。

私は、①短く②分かりやすく③丁寧に。この3点が重要だと考えます。そのためには、準備の段階で、丁寧に「理論武装」をすることです。わたしは、あえて「原稿」を作りませんでした。「暗記」では面接官の心を動かすことはできないからです。そこで、わたしは主張・事実(データ)を箇条書きにし、自分も聞き手もそれらに納得できるかどうかを考えながら、質問に対して臨機応変に答える練習をしました。面接官は、あらゆる角度から質問を用意しておられます。時には圧迫面接もされます。

最後に、わたしは、ひとりの力で合格を勝ち取ったものではありません。多くの先生をはじめ、先輩、友人、実習校の先生や生徒たちなど、様々な人と関わることで、わたしという人間を成長させることができました。わたしも、そのように、わたしを勇気づけてくれた人間になれるよう、これからも謙虚に学び続けていきたいと考えています。

外国語学部 英米語学科 4年生 古月 大輝さん

合格通知を受け取ってから、大学四年間の努力は無駄ではなかったと感ずることができました。正直なところ、英語力という観点から見れば私は決して教師に向いているというわけではありません。英検や TOEIC、TOEFL など良い成績をとったことなど一度もありません。英語力だけで見れば教員採用試験は不合格だったでしょう。しかし、絶対に教師になるという気持ちと、教師になってからの明確な目標があったからこそ合格という結果につながったと思います。関西外国語大学で教師を目指そうとしている後輩たちにはぜひ、教師になるという気持ちと、教師になってからの目標は持ち続けてほしいです。例えば、私の教師になってからの目標は、英語をわかりやすく生徒に教えることはもちろんのこと、児童生徒の不登校支援、帰国・渡日児童生徒学校生活のサポートです。これらの目標を見つけたことができたのは大学での授業やボランティアの経験を4年間継続して続けてこられたからだと思います。教師を目指す人はいろんな授業を履修し、たくさんのボランティアに参加して知識と教養、そして経験を身につけてほしいと思います。

合格できたのは私一人の力ではありません。教職の先生方、同じ教師を目指す仲間たち、そして家族のサポートがあったからだだと改めて感じます。私をサポートしてくれた人たちを裏切らないよう、責任をもって来年4月からの教師生活を過ごしていきたいと考えています。

英語国際学部 英語国際学科 4年生 久万田大海さん

はじめまして。この度福岡市で中学校英語教員として教壇に立つ事が決まりました。今回、教採という長きに渡る苦しい時期に何を考え、どのように行動したかを振り返り、後輩の皆さんには以下の3点をアドバイスとして挙げさせて頂きます。

① “自分だけの強み”を把握し磨き上げる

まず教採に合格するには他の受験者より“何か”秀でていれればいいと考えました。私であれば4年間オープンキャンパス運営会に所属して得た経験やバイトリーダーとして店を意識しながら働く事で培った考え方の2点が思い浮かびました。この2つの強みを早い時期に意識する事で双方に、改めて熱意を注ぐことで、より自分の強みに磨きをかける事が出来ました。

皆さんも「自分だけの強み」を見つけ、磨き上げてください。あなただけの強みが面接官をうならせる矛になり、心が折れそうになった際にも自分の中の頼れる芯、盾になります。

② “逆算力”が役に立つ

教採は準備期間から合格発表まで合わせると長い人で365日、自分のように一次試験1か月前にようやく火が付いた人でも150日という長期に渡る闘いです。時間がある一方で膨大な量の教職教養や一般教養の勉強をはじめ、結果次第では2次試験、3次試験の準備など切羽詰まる場面も多くなってきます。

やる事が多くなる程しんどくなるのは事実ですが、しんどさの軽減を出来るのもまた事実です。その為にはスケジュール帳と睨めっこをし、期間までに終わらせる事を一つ一つ決めていくことです。こうする事で「時間がなくなった」「出題範囲を網羅出来なかった」といった不測の事態も回避できます。

③ サボって、サボって、サボる。

朝6時まで遊び、平気で夜更かしをする。教師を目ざす者としてはすべきでない生活スタイルと思われるかもしれませんが、自分の中では「やるべき時に、やるべき場所で、やるべき事をやる」という一つの信念を持ち、徹底しました。教採に関する事や授業の宿題は学校で全て済まし、学校以外では一切触れない。眠ければ寝て、遊びたければ満足いくまで遊ぶ。そして“やるべき時”が来れば全力で目標に向かい“やるべき事をやる”。

「0か100か」という極端とも言えるべき方法から生まれる“やる気”は目標に向けて猛進するチカラを生み出し、無理をしないセーブの役割も果たしてくれます。

“You can't make an omelet without breaking eggs”、「やらな始まらん」という意味です。先輩たちは数多くのヒントをくれるでしょう。あとは後輩の皆さんが何を感じ、各々どう動くかです。皆さんが今後良い方向に進めることを願っています！

——☆学生人材バンク活動報告☆——

1、『子ども大学探検隊・中高生を対象とした大学体験事業』

子ども大学探検隊は、枚方市立小学校 21 校から 40 名が、中高生を対象とした大学体験事業は、枚方市立中学校 6 校から 22 名が参加してくれました。朝 10 時から 14 時まで、どちらも飛行機体験とフォトロゲニングの 2 本立ての活動で、昼食も一緒に過ごすという、児童・生徒にとっては大学生活を垣間見れた一日大学体験プログラムでした。オールイングリッシュに努めた学生にとっても、苦労した場面がたくさんあったようです。今回、運営メンバー 32 名をまとめた、リーダーにプログラム終了直後の感想を聞いてみました。



外国語学部 英米語学科 3 年生 小出 恭平さん

このボランティアに申し込んだきっかけとして、長期留学の選考から外れ、選考を通った子たちに負けない何かを、また日本にいる自分だからこそ出来るなにかがないか、という自分勝手な気持ちで応募しました。リーダーを任されることとなり、教職教育センターの人からも、今回はリーダーだからそんなに負担は大きくないと聞いていたので、甘い考えでいました。



いざ、ボランティアが始まると自分がこれまで体育会系の部活で経験してきたリーダーとは全く異なる難しさがありました。人間関係の難しさ、上級生がいる中でのリーダー、情報共有の大変さ、パイプ・共感的傾聴のしんどさ、様々なことが絡むなかで、自分の仕事および全体のことをしなければいけない状況に毎日がめまぐるしく過ぎていき、気がつけば 2 か月が経っていました。本番を迎えるまでに

リハーサルを 2 回しましたが、満足いくものが出来ず回を重ねるごとに各班との壁が厚くなるのを感じました。結局、前日の最終リハーサルで何とか他人に見せられるような形になり不安が残るままで本番を迎えました。

本番を迎え、朝、緊張と期待に溢れる小学生・中学生を迎え入れるいきいきとした大学生の顔を見ると、昨日までの不安が嘘のように消えて行きました。本番の 2 週間前まで見えない壁のあ

った大学生たちが意気揚々と自分から進んで児童・生徒らに声をかけ引率をしていました。ただ、やはり事前に予想していたタイムスケジュール通りには進まず、タイムキープをするのにごたつきでしたが、そこで全体を動かす上での心持ちや態度を学びました。なにはともあれ、小学生・中学生・大学生全員が最初から最後まで笑顔でいてくれたことが何よりの成功でした。

当日の本番を迎えるまでは、ホントに辛いし辞めたくてしかたなかったのですが、来てくれた小学生・中学生の楽しかったという言葉や嬉しそうな顔、そして、大学生のやりきった、という顔を見たとき辞めずに最後まで続けてよかったと思いました。周りの目や自分の立ち位置を気にせず、来年もやりますか。と尋ねられれば間髪いれずに、はい。と答えたいと思います。この3年生という時期にこのボランティアに出会えてよかったです。



外国語学部 英米語学科 3年生 井上 莉沙さん



留学に落ちてよかった、そう思わせてくれた子ども大学探検隊だった。というのは、このボランティアに参加したきっかけは、私は留学の選考に落ちてしまい、同じ教師という夢に向かって、今海外で頑張っている同級生に負けなように日本でできることをしないと、という焦りからだった。そして、それが初めて30人という人数をまとめる経験に繋がった。初めはミーティングでみんなの前で話すことさえ緊張していた。こんな自分がリーダーとしてやっ

ていけるのか、不安でいっぱいだった。さらに追い打ちをかけるように、このボランティアはわたしの予想をはるかに超え、人間関係、情報共有、そして空きコマが少ない後輩との時間の兼ね合いの難しさなど、多くの問題に直面した。しかし、そんなとき私の救いとなったのが、わたしよりも多くの経験をしていらっしゃる先輩方、そして中学校班のリーダーをしていた小出君という存在だった。先輩方にはいつもの確なアドバイスを頂き、心強い先輩方がいつも横にいて、安心して作業できる自分がいた。このボランティアの先輩方のように、来年は自分の存在が場の雰囲気や和ませ、後輩が安心して力を発揮できる場をつくりたいかなければいけないのだと再認識した。また、中学校班の小出君とは、同じ境遇の立場として多くの同感を得られるのが何より嬉しかった。小出君という存在によって、自分だけがつらいのではないと、いつも



認識させられるからこそ頑張れる部分が多かった。

また、このボランティアでリーダーをして、当日も裏方の作業を初めてすることによって、大勢の方に支えられているからこそ、私たちは無事にボランティアを成し遂げられたのだと強く感じた。最後まで文句を言わずについてきてくれたメンバー、いつも各グループの進捗状況を気にかけて、機材提供をしてくださった教職教育センターの方々、私たちの日程に合わせて教室を開閉してくださった守衛さん、当日元気いっぱいに参加してくれた子どもたち、そして、大幅な時間変更にも付き合ってくださった保護者の皆様。当日を迎えてみて、こういう多くの



方々の支えがあるからこそ、私たちは無事に怪我なく終えられたのだと強く実感した。自分の恵まれた環境に目を向けるきっかけを与えてくれたこのボランティアに感謝したい。そして、感謝の気持ちを持ちつつ、今回各々が発見した改善する点をこれから一つずつクリアしていき、このメンバーで少しずつ一歩前進していきたい。



2、『国際交流キャンプ』

前号に引き続き、四條畷高等学校の生徒が外大で行った英語活動、『国際交流キャンプ』の感想をお届けします。

高校生の活動や高校教員に興味がある学生は、★今後の学生人材バンク活動予定★欄に記載の「交野高校 English One Day Camp」にも注目してください。

外国語学部 英米語学科 3年生 宮内 花菜さん

このキャンプには去年も参加させていただいて、今年で2回目でした。このキャンプでは、四條畷高等学校の高校生と留学生がチームを組み、英語を使っていくつかのアクティビティをするものです。普段の高校生活では、なかなか英語を話せたり使えたりする機会が少ないであろう高校生にとって、このキャンプは学校で習った英語を実際に使い、自分の英語力を試せる場になると感じました。去年参加していた生徒で今年も参加している生徒が何人かいて、去年も参加させていただいた身としては嬉しかったし、ぜひ来年も参加してほしいと思いました。また、今年初めて参加した生徒が来年も参加してくれたら、とても嬉しいことだと思います。

1つ目は、タブーゲームでした。このゲームでは、カードに書かれた3つのキーワードを使わずに紙に書かれたお題を当てるといふものです。このゲームでは、高校生が自分の知っている範囲の語彙や文章などを使って、どうにか伝えようとする姿がとても印象的で、サポートしていた身としてはとても応援したくなる気持ちになりました。2つめは、NASA ゲームです。このゲームでは、それぞれのチームがそれぞれのスタイルで話し合いを進めていて特にこう話し合ってくださいと言わなくても結論を出していたのですごいなと感じました。この際に、留学生同士で話し合いが盛り上がり高校生が少し取り残されているようなチームもあったので、そのようなチームには外大生が留学生に「ゆっくりしゃべってな。」などともうすこし声をかけるべきだったかなと後悔や反省が残る結果となりました。3つ目は、ペーパータワーゲームです。このゲームの説明は私が担当しました。この際、言いたいことを言えなかったりして私の英語力はまだまだだと痛感しました。これから教師になるにあたってオールイングリッシュなどの授業を担当することになったら、今のスピーキング能力では十分ではないのでこれから鍛える必要があると感じました。このアクティビティを通じて、高校生や留学生の注意を引くにはより大きな声が必要であり、教師になるにあたってこのことは基本中の基本なのでこれから大人数の前でも大きな声で緊張せずはきはきとしゃべれるようにならなければと感じる一日でした。



来年も参加できるようにであればぜひ参加させていただきたいと思いましたし、また高校生の楽しそうな顔を見たいと強く思いました。ボランティアに参加させていただくことで、普段関わることのできない高校生と関われるので、これからも様々なボランティアに参加して自分の経験値

をあげていきたいです。実際に会って関わることで授業ではわからないことや教師になるにあたって収穫できるものも多いので、積極的に様々な取り組みに携わっていきたいです。

2、『海外教職インターンシップ』

こちらも前号に引き続き、カナダ、バンクーバーで体験した『海外教職インターンシップ』の感想をお届けします。

『海外教職インターンシップ』に興味がある学生は、★今後の学生人材バンク活動予定★欄に記載の「海外教職インターンシップ説明会」にぜひ、参加してみてください。春休み期間中に実施予定の当プログラムの募集内容について説明します。

外国語学部 英米語学科 3年生 木村 達矢さん

僕がこのインターンシップに参加しようと思ったのは、今まで留学などをしたことがなくて、でもこの大学に来たからには一度は海外に行ってみたいと思ったからです。普通の海外インターンシップもありましたが、せっかく教職課程を取っているのだから、この教職インターンシップに参加しようと思いました。

初週に行った語学学校では色々な国の留学生と共に勉強することで、日本の英語教育と他の国の英語教育の違いを知ることができました。彼らの話す英語はとても速く、ネイティブと変わらないんじゃないかというほどのレベルで、ついていくのが大変でした。日本の英語教育は文法ばかりに重点を置いていると言われますが、全くその通りで、もっとスピーキングやリスニングに力を入れ、生きた英語を教えていかなければならない、と自分が教師をみざす上でとても良いことを学ぶことができました。

インターンシップでは勤務先までバスで1時間ぐらいかかる所だったので大変でしたが、毎日がとても充実していました。最初はとても不安でしたが、職員の方は優しく、子どもたちも人懐っこくて、すぐに仲良くなれたので、初日からとても楽しく過ごすことができました。ただ子どもたちの英語を聞き取るのは難しく、時にはコミュニケーションに困った時もありましたが、たくさん接しているうちに何となく彼らの言いたいことが分かるようになりました。このインターンシップを通して、何事にも積極的に、自分から進んで取り組むことが大事だということを学びました。

ホームステイ先のファミリーもみんなとても明るくフレンドリーで、本当の家族のように僕と接してくれました。僕のホストファミリーは大家族で、うるさすぎるほど賑やかだったので毎日がとても楽しかったです。

まとめとして、お金の問題などもあり気軽に友達を誘って参加したりするというようなことは難しいと思いますが、お金にはかえられない経験がたくさんできることと思います。僕は3回生ですが、特に1、2回生は今後の勉学や必修授業などに活かせることがたくさんあると思うので、是非参加してみてくださいはいかがでしょうか。

3、『小学校いきいきプログラム』

まだまだ続くこの『小学校いきいきプログラム』は、ちょうど折り返し地点を迎えたところです。児童の様子が変わり、活動の改善点が見えてきた反面、どのように改善すればいいのか、グループ活動の難しさや英語の楽しさを伝えるためにはどうすればいいのか…といった根本的な問題も出てきました。引き続き、活動について学生に聞いてみました。

英語キャリア学部 英語キャリア学科 小学校教員コース 2年生 谷山 真名美さん

いきいき活動で、実際に小学校に教えに行くまでの小学生のイメージと、活動後の小学生のイメージが私の中で大きく変わりました。活動開始当初は小学生をあまりよく理解していなかったため、小学生にとって難しい内容の活動を考えたり、アクティビティを楽しんでもらえなかったりと大変に感じました。しかし、活動を通して段々と小学生についてわかってきて、活動内容を工夫し、アクティビティについても小学生目線で考え、楽しんでもらえるようなものを作れるようになりました。

また、活動内容については、個人で考えるのではなくグループで毎月の活動内容について考えているので、自分では考え付かなかったような教え方やゲームなどを知ることができ、いつも「そういう教え方があるのか」や「そういう風を楽しみながら学ぶと、英語をもっと身近に感じてもらえるのか」というように日々私自身も勉強させてもらっています。

実際の活動では、小学生をまとめるのは想像していたよりも大変難しく感じました。また、指示を出すテンポの大切さ、適切なメリハリ、小学生を引き付けるための小さな工夫であるといった、模擬授業とは違った、実際に小学生と関わってみないと分からない事をたくさん気付かせてもらいました。

まだ今年の活動もあと半分残っているので、参加してくれている小学生に少しでも英語を楽しく学んでもらえるよう精いっぱい頑張りたいと思います。

——★今後の学生人材バンク活動予定★——

教職教育センター前掲示板や外大メールも確認してください。

- ・OB・OG教員のつどい:10月28日(土)
- ・楠京阪幼稚園 Halloween Party:10月31日(火)10:00-11:30
活動の妨げにならないよう配慮していただければ、見学も可能です。ぜひ見に来てください。
なお、活動の様子や園児の撮影はしないでください。
- ・平野フェスティバルお化け屋敷:11月4日(土)
- ・交野高校 English One Day Camp:11月4日(土)
- ・小学校いきいきプログラム:11月11日(土)枚方市立山田小学校
11月18日(土)枚方市立平野小学校
- ・海外教職インターンシップ説明会:11月14日(火)12:30 6105教室～バンクーバー編～
:11月21日(火)12:30 6105教室～セブ島編～

——編集後記——

行楽シーズンですね。秋は国内旅行の消費が伸びるそうです。みなさんは、47都道府県のうちいくつ行ったことがありますか。通学で3府県跨ぐ学生もいれば、北海道から沖縄まで制覇したという強者もいるかもしれません。しかし、厳密な県境はあるようで、ないようで、電車に乗っていたりすると、はっきりと“ここから”とは見えないことが多いです。あらゆるものには境があると同時に、境には曖昧さもありません…野菜と果物、季節、合否、成長、善悪、ジェネレーションギャップ、海の潮目、独りの自分と人という時の自分、人生の岐路…。

47都道府県は日本にあり、日本は地球に、地球は宇宙に、と考えると県境には意味があるようで、ないようで、難しい思考へと誘われます。境とは何でしょうか。

シリーズ⑳ 「心の窓を少し開いて！」

短期大学部 教授 明石一郎

【アクティブ・ラーニング】

授業におけるアクティブ・ラーニングの重要性が提唱されている。キーワードは「主体的・協働的な学び」である。文部科学省の定義によれば、

「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれ、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効である」

ではなぜ今、アクティブ・ラーニングが求められているのだろうか？

それは、グローバル社会の到来とともに絶え間ない技術革新の進展や社会の有り様が大きく変革する時代において、変化に対応する主体的能力や知識や経験を活用して未知の課題にチャレンジしていく能動力等を備えた人材が求められるからである。

アクティブ・ラーニングを通じて学修者が主体的・協働的に学びを深めるためには、授業における3つの視点が重要である。それは、①学修のねらいの「焦点化」、②学習内容の「視聴覚化」、③学修者相互の「協同化」である。

エドガー・戴尔（Edgar Dale：米国、オハイオ州立大学教育学教授）の学習定着の法則によれば、

- ・ 講義だけなら5%
- ・ 読むだけなら10%
- ・ 聞くだけなら20%、
- ・ 見るだけなら30%
- ・ 見て聞くと50%
- ・ 言うか書かかすると75%
- ・ 他の人に教えると、90%

学習効果が高まると提唱している。



人は受動的な学修はすぐに忘れるが、試したり、失敗したり、他人に伝えたりする行動を伴う主体的な学修活動（活用）を行う場合に「アクティブ」になるのである。